



←手前が御詠歌をうたうご婦人。向こう、左が祭壇と右に並ぶのが松戸仏教界の僧侶たち。

→川施餓鬼の日。僧侶が舟に乗って江戸川でお経をあげる。

戻り梅雨とでもいうのだろうか。このところ曇り日が続いている。

太平洋の東で発生した台風五号は、小笠原あたりをうろろしながら南に下っている。一方で六号、七号、八号はすでに消滅し、いまは九号が石垣島方面をかすめて台湾方面を襲った。そして後を追うように十号が発生して北へ向かっている。

昨年も異常だったが今年も台風に関しては異常なのだろうか？ 昨年のようなことがなければいいのだが、いささか心配ではある。

そんなこととは関係なく、矢切の渡しでは毎年恒例の行事があいついで行われた。最初は二十四日の川施餓鬼（かわせがき）。松戸市の仏教界が、この一年間に水難事故、交通事故など不慮の事故で亡くなった人を追悼するために祈りをする行事だ。

矢切の渡しの広場に祭壇を設け、ご婦人方が御詠歌を詠じ、僧侶たちがお経をあげる。

「むかしは川施餓鬼が終わると祭壇に供えてあった野菜や果物などを川に流

## 今週のクマ

→クマの数学の時間、2といながら指を2本だすとワン、ワンと2度、吠える。



→毎年、7月の最終火曜日に行われる葛飾・柴又の花火大会。花火の向こうの横に線状に見えるのは東京の街の灯り。



したもんだそうだ。おじさんたちが子どものところには、それをねらって川下に飛び込んで拾ったそうだ」

舟頭さんが祭壇を片付けながらそんな話をしてくれた。

もちろん、いまは江戸川で泳ぐなんてことはできない。お供え物を川に流すなんてこともしない。

この川施餓鬼の行事は毎年、7月の最終の友引の日に行われている。いつのころに始まったのか舟頭さんは覚えていないそうだが、少なくとも一〇〇年以上も前、もつと前かもわからないそうだ。

川施餓鬼の翌日、二十五日は対岸の葛飾・柴又の花火の日だった。この花火は毎年、7月の最終火曜日に行われる。

川向こうの花火大会だが矢切の渡し周辺には千葉県側の人たちが大勢、見物にやって来る。対岸の柴又側は席がつくられていて有料だが、矢切の渡しのある千葉県側からは無料だ。

ただし、花火に裏と表あるとすれば矢切側からは裏を見ることになる。たとえば裏花火でも見事なものだ。

土曜日の二十九日は隅田川の花火大会だったが、こちらは音だけだった。